

シュウゴの旅

奄美市立宇宿小学校

六年

徳とく蓮れん大た

ぼくは、ツバメのシュウゴ。渡り鳥で、一年で五千キロ、六千キロははばたくんだよ。そのためには、エサをいっぱい食べないといけないんだ。ぼくは、昆虫、カエル、時には小鳥もおそうこともある。こんなぼくにも天敵がいる。一番の大敵は、まっ黒のあいっ。

「カラス。」

なぜカラスが天敵かって。その理由は、かわいいぼくの子供を食べてしまうからなんだ。

ぼくは今、インドネシアにいて日本に行くために、エサをいっぱい食べているところなんだ。でも、日本に行くまであと六ヶ月ってときのこと。ぼくは夜になったからねえようとしていたんだ。するとふと何かいるなって気がしたんだ。

「へびだ。」

ぼくはさけんだんだ。でもとなりにいたツバメさんのおかげでなんとか逃げる事ができたんだ。あのときはあぶなかったな。そんなこともあったけど、ようやく日本へ出発のときになったんだ。やっと日本に行ける。そし

てみんなでインドネシアを旅立ったんだ。目指すのは奄美大島。でも、ひとつとびでは行けないから、沖縄でいったん休む計画なんだ。

沖縄には、観光客と呼ばれる人がたくさんいた。ゆっくり休みたいのに休んでいると観光客が周りに集まってきた、写真を撮ったりさわったりしてくる。ゆっくり休むことなんてできなかったから森で休むことにした。でも、森でも視線を感じたんだ。またもやへびだ。しかも今回はハブだ。ぼくがハブをにらんだそのしゅん間、やつがとびかかってきた。右によけてハブの腹部に口ばしを向けて突撃した。するとハブに命中し、ハブは痛くて逃げていった。ぼくみたいな渡り鳥にこんな戦いは日常茶飯事さ。おかげで初めはこわくて逃げていたけど、もうへっちゃらさ。そんな困難もあったけどようやく奄美大島に着いた。

ぼくの好きな奄美大島は、自然が豊かで親切な人間がたくさんいる。目的地はその島の中の北部にある宇宿小学校だ。その小学校の一輪車置き場の屋根の隅がお気に入り。そこは、うす暗くて見つかりづらいから天敵に見つかりにくい場所にある。今回もぼくはその場所に向かった。去年ぼくが巣を作ったあとが残っていたので、その巣を使うことにした。泥やワラ、枯れた草を口にくわえて運び、それをぼくのだ液で固めて巣を作り直した。

これで安心して子育てができる。ここでぼくは嫁のシュウコを待つことにした。二日後にやっとシュウコが到着した。ぼくたちの社会では、経験豊富なツバメが人気だ。シュウコと結婚できたけど、誰かにうばわれるんじゃないか、ぼくのところに来てくれないんじゃないかと心配だったんだ。そんなぼくとシュウコの間に四つの卵ができた。シュウコは卵を温め、ぼくはエサをシュウコにあげる。それがぼくたちの仕事だ。

ある日、エサを探していると、学校の広い校庭で子供たちが走り回っていた。このときぼくは、

「何をしているんだらう。」

と思った。そしてまたある日には、何人かの子供が頭を下にして立っていた。

「人間は本当におもしろい生き物だな。」

と感じた。ぼくは、人間を観察しながらエサ運びをがんばった。

そんなある日、エサを探しているとシュウコの鳴き声が聞こえた。

「どうした。」

と思いつぐにもどつてみると、四つの卵がふかしていたのだ。かわいいわが子を見ていると、

「もつとエサをとるぞ。」

とやる気が出てきたんだ。いつも以上にはりきつてエサ

探しをした。

子供たちはすくすく成長し、安心してエサ探しができるようになった。でも、ある日、遠くからシュウコの悲鳴が聞こえる。ぼくは、くわえていたエサをはなし、シュウコの元へ向かった。するとそこには、またもやハブがいたんだ。インドネシアや沖縄のときより大きいハブがいたんだ。あまりにも大きいので、

「ぼくたちは無理かもしれない。」

と思ったしゅん間、長いぼうが目の前にあらわれた。人間の大人がハブをつかまえてくれたのだ。この人間のおかげで、シュウコと子供たち、ぼくの命は救われたんだ。

無事に元気に育った子供たちは、飛ぶ練習をがんばり、巣立っていった。

いつの間にか、夏が終わりに近づき、この奄美大島からも旅立つときがきた。ぼくとシュウコは飛び立つ準備を始めた。エサをたらふく食べた。秋になり、ぼくたちはまたインドネシアへ向かうのであった。

ぼくたちツバメ族は、一年中こんな生活を送っている。来年はどんなことが起きるのだろうか。ぼくたちの旅はまだまだ続く。